

て、各種の規制をパスして、実用の段階が一日も早く来ることを望むものである。

特別講演第2部は、渡辺英男先生の「ミツバチ関連業の特集」のテーマで、アピモンディア養蜂経済担当理事の先生のお話であった。世界的な視点と広範な知識、実践の中から養蜂業の将来と、自然環境のあり方を説かれた。行政や、他力への異存でなく、業者が手を取り合って自主努力で業界の発展に取り組まなくてはならないと、切々と説かれていた。

昨年京都では自然環境京都会議が開かれ、世界的規模で環境への見直しや反省も行われたことは、自然環境を唯一の生産基盤とする我々養蜂業者にとっては、ようやく一筋の光の見え始めたことと考えられる。それらの反省がなければ、人類に未来はないのではないだろうか。渡辺さんの説くWADDの思想は、経済問題だけにとどまらず、南北問題でもなく、現在と未来への継承の思想であり、基の視点にそった話には説得力があり、本当に胸に響くお話であった。講演が終わったとたん、県から出席していた養蜂家の一人が飛んできて、「今度県の総会

では是非もう一度話を聞きたい。頼んでくれ。」と頼みに来た。ちょうど来合わせた渡辺さんに話し快く承諾を得た。県ではさらに、続きをわかりやすく話してもらうことにする。久しぶりの研究会参加で、多くの知友に会えた。それぞれに健康を祝し、親睦を深めることが出来たことは、非常に喜ばしかった。混沌とした世相は相変わらず先行きの不透明を秘めているが、久しぶりにあった人々は皆元気で明るかったのがまた、今後への励みにもなった。特に、今日の研究会では腐蝕病に対する講演を聴いて養蜂業界の難問に明るい兆しが見えたことは、本当に嬉しいことである。

懇親会では、思いがけず乾杯の音頭を取る光栄に浴して、感謝の気持ちでいっぱいである。肥後君の暖かい心遣いも感じられ、忘れ得ぬ一日であった。昨年の天候は晴雨交互に申し分なく過ぎて、暖冬気味の昨今はレンゲやミカンの木の生育を促している。蜂飼いの宿命か、今年の豊作を祈念して筆を置く。

(〒424-0874 清水市今泉 89-6

農事組合法人クキンビーガーデン養蜂組合)

展示会「蜂は職人・デザイナー」

標記のタイトルのユニークな展示会がINAXギャラリーで開かれた。蜂の巣は、素材面では泥、植物の葉、パルプ、ヤニ、ワックス、造形面では壺型から六角形まで、と変化に富んでおり、それぞれに機能美を誇っている。これらが洗練された展示空間に効果的な照明を得て、標本でありながら息づいて見える。中でもキオビホオナガスズメバチの巣（玉川大学所蔵）は、まさに和紙で作った芸術品という感じで、紙の発明のヒントになったことをうなずかせるし、オオスズメバチに勝るとも劣らない体格の巨大アシナガバチの巣（三重大学所蔵）はそれだけでも一見の価値がある。

一方、これを機に出版された同名の本（INAX出版、次号で紹介予定）も、生物学のみならず、古来からヒトがこれらの構造物に注目



スズメバチ、ミツバチ…各種の巣が並ぶ壮観な展示してきた歴史にも触れ、見逃せないものとなっている。大西成明氏による巣の写真が美しい。
(佐々木正己)

東京での開催は終了、大阪（6月9日～8月22日、電話 06-539-3518）、名古屋（9月8日～11月22日、電話 052-201-1716）の各INAXギャラリーにて開催（詳細は各会場へ）。